



Data

監督・脚本：セドリック・クラピッシュ

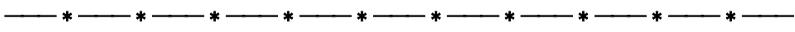
出演：ロマン・デュリス/オドレイ・トトゥ/セシル・ドゥ・フランス/ケリー・ライリー/サンドリーヌ・ホルト/マルゴ・マンサール/パブロ・ミュニエ=ジャコブ/フー・ボナヴェンチュラ/ブノワ・ジャコブ/リー・ジョン・リー/ピーター・ハーマン

👁️👁️ みどころ

『スパニッシュ・アパートメント』（01年）は、バルセロナに留学した25歳のフランス人男グザヴィエを中心とする7人の男女が織りなす奇妙な同居生活を描いたメチャ面白い映画だった。3年後の第2部『ロシアン・ドールズ』（05年）を経て、40歳になったグザヴィエは、なぜか今ニューヨークへ！

それがセドリック・クラピッシュ監督の「青春三部作」の第3部たる本作だが、グザヴィエを取り巻く女たちは基本的に不変。そればかりか、それぞれ子供が生まれているから、そのさばき方(?)は難しそうだ。そのうえ、ニューヨークで生きていくため、弁護士との相談の結果、偽造結婚のアイデアも現実・・・。

日本ではありえない「フランス的恋愛至上主義」の到達点を、タツプリと堪能したい。



■□■どこかで見た主人公と女たち！なるほど、なるほど■□■

本作の主人公となる小柄なフランス人男グザヴィエ（ロマン・デュリス）は、どこかで見た顔。また、『アメリ』（01年）で世界的に有名になったフランス人女優オドレイ・トトゥ演じるグザヴィエの元恋人マルティヌもよく覚えている顔だし、男言葉を操るレズビアンの美女イザベル（セシル・ドゥ・フランス）の顔も見覚えがある。さらに、2人の子供を連れてグザヴィエの元を去り、ニューヨークに行ってしまったというグザヴィエの妻ウェンディを演じるイギリス人女優ケリー・ライリーの顔にも見覚えがある。そう、彼

らはめちゃ面白い青春群像劇だった、フランス人監督セドリック・クラピッシュの『スパニッシュ・アパートメント』(01年)、『シネマルーム4』312頁参照)に登場した俳優たちであり、その俳優たちが演じる同じ役柄なのだ。

本作を観る前は何の情報も集めなかったので全くわからなかったが、そう理解できたうえでパンフレットを読むと、なるほど、なるほど……。つまり、本作はセドリック・クラピッシュ監督が「青春三部作」と名付けて作った、グザヴィエとその女友達たちを描く面白い映画の完結編らしい。とは言っても、2作目となる『ロシアン・ドールズ』(05年)を私は観ていない。したがって、第1作目の『スパニッシュ・アパートメント』では、25歳の留学生だったグザヴィエが、3年後の『ロシアン・ドールズ』で、イギリス人女性のウエンディと結婚したことは知らなかったから、さらにその10年後となる本作の展開についていくのは最初は少し難しかったが……。



■□■ 40歳は「不惑の年」だが、本作の主人公は大違い！ ■□■

孔子は「巧言令色鮮し仁」と教え、また、「四十にして惑わず」と教えたが、孔子の教えは日本人にはマッチしても、フランス人には全然合わないようだ。第1作目の『スパニッシュ・アパートメント』では、スペインのバルセロナに留学した25歳のフランス人グザヴィエの、人妻とのラブラブ関係も含めた多種多様な女性関係が描かれた。そして、第2作目の『ロシアン・ドールズ』では、行きずりの恋の数々や別に恋人を持ちながらのウェ

ンディとの恋が描かれたそうだが、グザヴィエが40歳になった本作でも、グザヴィエのさまざまな女性関係が描かれる。しかし、セドリック・クラピッシュ監督が第3作目の構想を10年間も温めていたのは、そこに子供を登場させるためだから、本作ではすべての女性関係に子供が絡んでくるので、話は余計ややこしくなってくる。

そこで、『スパニッシュ・アパートメント』の時と同じように、グザヴィエの女たちとその子供たちを整理しておく、次のとおりだ。

- ①レズビアン親友だったイザベルは、ニューヨークで恋人の女性ジュー（サンドリーヌ・ホルト）と仲良く暮らしていたが、精子提供を依頼されたグザヴィエがそれを快く応じたことから、妻ウエンディとの仲が少しおかしくなることに・・・。
- ②グザヴィエと妻ウエンディとの間には長男トム（パブロ・ミュニエ＝ジャコブ）と長女ミア（マルゴ・マンサール）がいたが、仕事で出かけたニューヨークで新しいアメリカ人の恋人ジョン（ピーター・ハーマン）ができたウエンディは、2人の子供を連れてジョンと新生活に入ることに。
- ③グザヴィエが25歳の時、パリに残したフランス人の恋人マルティエヌ（オドレイ・トトウ）は長男リュカと長女ジェイドという2人の子供を抱えながら、今や立派なキャリアウーマンに成長。グザヴィエと別れた後、現在マルティエヌのすぐ近くに男の影は見えないようだから、中国語も操りながらニューヨークまで出張でやってくると、ひょっとしてグザヴィエとの恋（腐れ縁？）の復活も・・・？

このように、「青春三部作」の中でスペインのバルセロナ、ロシア、そしてニューヨークと舞台こそ大きく変わっても、グザヴィエを取り巻く3人の因縁の女性との接点は変わらない。したがって、本作では40歳にして、そんな女性関係に感ってばかりのグザヴィエの生きざまをしっかりと楽しみたい。

■舞台はニューヨークだが、チャイナ色もタップリと！■

ベテランのハリソン・フォードが若手のリアム・ヘムズワースと共演した『パワー・ゲーム』（12年）では、ニューヨークのブルックリン橋を挟んだ「こちら側」と「あちら側」では、同じ白人でも全然人種が違うことが徹底的に描かれていた（『シネマルーム33未掲載』）。本作でもそれが強調されている他、新たにチャイナタウンが登場し、それが大きな意味を持つのでそれに注目！パリでの執筆の仕事があるのに、グザヴィエが「執筆はニューヨークでもできる！」とばかりに勇んでニューヨークにやってきたのは、いわば「逃げた女房を追っかけてきた、みじめな亭主」という想定。したがって、グザヴィエがニューヨークでただ1つだけ接点のある女性イザベルの家を訪ねたのは当然だが、大きなお腹を抱えた彼女が中国系アメリカ人ジューと暮らしているのは、ブルックリン橋を渡った東にあるブルックリン地区のアパートだ。

それに対して、ウエンディがジョンと暮らしているのはセントラルパークの南側で、マンハッタンのだ真ん中。そこはミッドタウンの高級アパートが建ち並ぶ地区だ。その場所

をイザベルから聞き、地下鉄を乗り継いで1人でやってきたグザヴィエは、超高層の高級アパートの群れに驚くとともに、ウェンディのパートナーであるジョンの体格の良さにもビックリ。さらに、日常生活に不便のない程度の英語はしゃべれても、洗練された英会話のできない自分にグザヴィエは劣等感を抱くことに・・・。

■□■ニューヨークの都市事情、住宅事情をしっかりと！■□■

ニューヨークに1人でやってきた場合、何よりも住居探しが大変だが、本作のグザヴィエを観ていると、パリよりも東京よりもニューヨークではそれが更に大変なことがよくわかる。「精子提供」という重大な協力をしてくれたグザヴィエへの感謝の気持から、ジューが昔住んで



いたチャイナタウンにある小さな部屋を貸してくれたのはラッキーだったが、このチャイナタウンは、マンハッタンの南部に位置している。

本作のパンフレットには、渡辺祥子（映画評論家）氏の「ニューヨークでは誰もがニューヨーカー」というコラムがあるので、それを参考にしながら、その3つの住居地をしっかりと対比し、都市事情、住宅事情を把握したい。近年、太平洋をめぐる米中のパートナーシップ関係が強まり、中国の習近平国家主席はオバマ大統領に対して、米中による「太平洋二分論」を唱えているが、本作にみるニューヨークの住宅事情をみても、中国の影響力の大きさがよくわかる。

■□■チャイナ色は、新たな女性関係にも・・・■□■

弁護士の私としては、本作に見るニューヨークの住宅事情の他、ビザ問題にも十分注目してもらいたい。フランス人であるグザヴィエがニューヨークに入国したのは、もちろん「観光ビザ」。したがって、今後ニューヨークに長く滞在するには、何らかの「就業ビザ」を取得しなければならない。本作では、そんな相談のためグザヴィエが某弁護士事務所を訪れるシーンが登場するので、それにも注目！「相談だけで200ドル！」と嘆くシーンや、大部屋で怒鳴り合いのように相談を聞いている安モノの弁護士事務所（？）のシーンを見ていると、日本以上にニューヨークの弁護士の競争が激しいことが実感できる。

そんな中、グザヴィエが某弁護士の「中国人女性と結婚しろ。そうすればあとは俺がす

べて非合法から合法に変えてやる」とのアドバイスに従ったのはある意味やむをえないが、これはホントはかなりヤバイはず。もし、この弁護士が「偽装結婚」を勧めているとすれば、それは明らかに犯罪だから、彼の弁護士資格も取り消されてしまうはずだ。もっとも、本作はそんな法律問題をテーマにした映画ではない。そして、グザヴィエがいとも簡単に(?) 中国人女性ナンシー(リー・ジュン・リー)と結婚式を挙げるストーリーはそれなりの面白さとそれなりの必然性があるので、それをしっかり楽しみたい。

■□■これはホントの結婚?それとも偽装結婚?■□■

『エヴァの告白』(13年)では、入国審査局の審査官による厳しい入国チェックの様子が描かれていた(『シネマルーム32』68頁参照)。また、韓国映画『ディープ・ブルー・ナイト』(85年)では、アメリカの永住権を手に入れたい主人公が偽装結婚の常習犯と結婚する姿が描かれ(『シネマルーム2』233頁参照)、同じく韓国映画『ダンサーの純情』(05年)では、朝鮮族自治州から偽装結婚までして韓国に入国するヒロインの姿が描かれていた(『シネマルーム19』125頁参照)。そして、そこでは両者とも移民局の役人が偽装結婚の疑いをさかんにチェックする姿が印象的だった。しかして、本作にみるグザヴィエとナンシーとの結婚は、ホントの結婚?それとも偽装結婚?

私は弁護士として中国人女性と日本人男性との「結婚ビザ」取得の仕事をしたことがあるが、そこでの私の役割はホントにこの2人に結婚の意思があり、ホントに結婚生活を営む実態があるかどうかの事前チェック。そこでもし「偽装?」という疑いが出るようなら、日本の入管で結婚ビザを取得することはできないからだ。この点、本作に登場する某弁護士がどこまで私と同じようなチェックをしたのかは描かれませんが、それに代わって、移民局の「質問するのはこの俺だ」と、権利を振り回す嫌な役人の質問ぶりに注目!また、日本の入管にもアメリカの移民局にも「抜き打ち検査」があるから、その時それにどう対応するかが大変。本作では最悪の事態の中で行われる抜き打ち検査がクライマックスになるので、そのドタバタぶりを確認し、かつ楽しみたい。

■□■フランス的恋愛至上主義を再確認!その1■□■

韓国では旅客船セウォル号沈没事故が起きた2014年4月16日に、朴槿恵(パク・クネ)大統領が国会議員時代の秘書室長であったチョン・ユンファと「密会」していたことが報じられて、大騒動に。そのとぼっちり(?)で「大統領をめぐるうわさ」と題した朝鮮日報のコラムをウェブサイトに掲載した産経新聞前ソウル支局長の加藤達也氏が、2014年10月8日に情報通信網違反罪で起訴されるという前代未聞の事態になっている。それに対してフランスでは、フランス初の実婚カップルであるオランダ大統領の某女優との密会スキャンダルに象徴されるように、フランス的恋愛至上主義は今なお健在だ。1月6日付読売新聞夕刊によれば、オランダ大統領の実婚の元パートナーであったパレリ

ー・トリエルバイレールの手によるオランダ大統領の浮気や、2人の私生活を書いた「暴露本」が70万部を超すベストセラーになったうえ、映画化されることが報じられた。

本作のパンフレットには、野崎敏氏（フランス文学者、東京大学教授）の「フランスの恋愛至上主義がたどりついたあっぱれな境地」という面白いコラムがある。これを読めば、セドリック・クラピッシュ監督の「青春三部作」に観るグザヴィエの恋愛至上主義の本質と、それに関連するウェンディ、マルティース、イザベルを中心とする3人の女たちの輝きや自己主張のあり方がよくわかる。

本作ラストのクライマックス(?)は、自分のアパートをイザベルがベビーシッターとして雇った、同じイザベルという名前の若い女性（フロール・ボナヴェンチュラ）と（レズビアン）の浮気をするために、1時間あまり提供することを承諾した途端に、移民局の役人から「抜き打ち検査」に行くと告げられたところから生まれるドタバタ劇となる。急いで帰ったグザヴィエは、何とか素っ裸状態の2人のイザベルを部屋から外に逃がし、続いて入ってきたナンシーとともに移民局の役人を迎え入れたが、その様子が何となく怪しげなことは明かだ。さらに、そこにはトムとミアを連れたウェンディが入ってくるわ、マルティースも入ってくるわ……。一体どのようにこのドタバタ劇の收拾をつけるの？

■□■フランスの恋愛至上主義を再確認！その2■□■

公園で遊んでいたトムとミアには、既にベビーカーでおねんねしている赤ちゃんの父親がグザヴィエであることがわかってしまったようだが、グザヴィエはその赤ちゃんがトムやミアの腹違いの弟（妹？）であることを、どのように説明するの？



『スパニッシュ・アパートメント』で観た25歳のグザヴィエも愛を求めてさまざまな女性と「その道」を探求していたが、フランス人男の恋愛至上主義は40歳になっても全く衰えないことがグザヴィエを見ていると実によくわかる。そのうえ、本作では何と最初から恋人だったフランス人女性マルティースとニューヨークで久しぶりのセックスを重ね

る中で、再びヨリを戻し、一緒に暮らすことを決意したようだ。そうすると、せっかく移民局を納得させたナンシーとの結婚はやっぱり偽装・・・？

①元恋人マルティヌと、その2人の子供たち、②別れた妻ウェンディと、その2人の子供たち、③レズビアン親友イザベルと、精子提供の結果生まれ、認知までした赤ちゃん、そして④偽装結婚かどうかは別として、結婚式まで挙げ、婚姻届を出した中国人の妻ナンシー。グザヴィエの周りにはこれだけ華やかな女関係とその子供たちが存在していることになるから、すごいものだ。

■□■「青春三部作」第4部の可能性は？■□■

セドリック・クラピッシュ監督は本作で「青春三部作」は一応終了とインタビューでは答えている。しかし、「第4部を作るのは間違いだと思うよ」と答えつつ、続いて「しかし、10年で自分がどう変わるかわからない。もしかすると本当に素晴らしい続編のアイデアが浮かぶかもしれない。10年の間に何が起きても不思議ではないよ」と答えているから、第4部の可能性は大ありだ。

グザヴィエの恋愛能力と生殖能力は少なくとも50歳までは大丈夫だろうから、仮に10年後に第4部が製作された場合、グザヴィエのフランス的恋愛至上主義の展開は如何に・・・？少子高齢化が進み、男女の恋愛の価値が相対的に下がっている昨今の日本を嘆いている私としては、是非それを見せてもらいたいと考えているが・・・。

2015（平成27）年1月7日記

